修養会を覚えての全校礼拝②

（高校二年生による礼拝）

聖書箇所：マタイによる福音書5:43-44

”「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。”

――――

皆さんは、自分にとっての敵、またはライバルなど争う相手がいますか？

きっと今まで生きてきた中で誰しも1度は喧嘩をして争ったり、競争をした経験があるのではないでしょうか？

私は幼い頃とても負けず嫌いで、何事も常に周りより優れていたくて、いつも誰かと競争していました。

私は4歳から約13年間クラシックバレエを習っていました。厳しい競争が絶えないバレエ界は正直とても辛く、辞めたいと思うことが何度もありました。例えば、発表会の配役決めでは良い役をもらうと友人から沢山の嫌がらせを受けました。私から話しかけても無視をされ、避けられました。そんな辛い状況に置かれてもバレエを続けていたのは、幼い頃からの負けず嫌いな性格のおかげだと思います。どんなに酷いことをされても、いつか認めてもらえるように努力をし続けました。しかし、バレエの世界はとても広いため、全国のコンクールに出場するようになると、自分より優れた才能を持っている人が数えきれないほど私の前に現れました。負けず嫌いな私は悔しくて、自分より優れている人の悪いところを探して安心していました。相手を蹴落としてでも1番になりたかった私は今考えると、人として愚かだったと思います。

しかし、この自分がいつも1番が良いという思考が変わった出来事がありました。

それはDragon NightというSEKAI NO OWARIの曲との出会いです。

この曲は、第一次世界大戦のクリスマス休戦という実話がモチーフになっていて、歴史的なクリスマス休戦から100周年目にあたる2014年にSEKAI NO OWARIの深瀬さんが作詞作曲をし、リリースされた曲です。

クリスマス休戦とは、第一次世界大戦の戦場で敵対していたドイツ軍とイギリス軍の兵士たちがクリスマスの休日の前後に数日間だけ休戦した出来事です。
その年のクリスマス、数カ月にわたる戦闘を経て戦いに疲れていた兵士たちは、双方の合意のもとで武器を置き、中間地帯を越えて、互いの兵士たちとプレゼントとして物資を交換したり、サッカーの親善試合をしたりしました。
戦争中で攻撃しあっている相手であるはずなのに、聖なる瞬間に互いの違いを受け入れ、武器を置き、手を携えられる力があることに私は当時とても衝撃を受けました。
今まで敵と「楽しい」や「嬉しい」といった感情を共有することなどありえないと思っていた私ですが、この曲に出会い、どんな憎い相手とでも共に楽しめる瞬間があっても良いのではないかと思えるようになりました。
100年前のクリスマス休戦は、戦争と社会不安の絶えない現代においても希望の光を放ち、人類の持つ可能性を思い出させてくれる出来事です。

今回お読みした聖書箇所は隣人愛について書かれた有名な箇所です。
何度も開いたことがあるページですが、改めて「隣人」という言葉を調べると、隣人とは「仲間」、「家族」、「身内」だけのことではなく、「普段関わりのない人」のことも指しているということがわかりました。イエス様は各地を旅して歩き、さまざまな出会いの中で、救いや助けを求める人々だけでなく、イエスのことを憎む人でさえをも隣人として受け入れ、愛されました。

これから先、生きていく中で、ライバルや敵と言い争いをしたり、誰かと比べて焦ったり、競わなければいけない状況に置かれることが必ずあると思います。
高校生になると突き付けられる大学受験という壁も、自分との戦いではありますが、数字で比べられ、競い合い、合否が決められます。

様々な状況の中で、競っている相手のことを羨んだり、憎んでしまうことがあるかもしれません。しかし、その「憎らしい相手」も「自分の味方」も同じ「隣人」です。
また本当に恨み合っているわけではなく、一旦心をニュートラルにしてみると、そんなに争うことでもなかった、ということがあるかもしれません。

隣人は、時に「敵となりライバル」となりますが、同時に「自分を強くしてくれる存在」でもあります。
隣人を愛すること。これは簡単なことではないかもしれません。
しかし、いつもぶつかり合っている相手とも、たまには楽しい瞬間を共有できる、隣人を愛することができる人になりたいです。

（高校二年生による全校礼拝より）